

令和7年度  
対馬市島おこし協働隊年間活動報告



© Maya Murata

## 目 次

|                            |       |
|----------------------------|-------|
| 1.対馬市島おこし協働隊制度概要           | P1    |
| 2.対馬市島おこし協働隊 隊員プロフィール      | P2    |
| 3.令和7年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨) |       |
| 中屋 桜 隊員 (対州馬保存・活用支援担当)     | P4    |
| 4.令和7年度島おこし協働隊 年間活動報告書     |       |
| 中屋 桜 隊員 (対州馬保存・活用支援担当)     | P6～P9 |

## 対馬市島おこし協働隊制度概要

地域づくり課 島おこし協働隊事務局

| 分 類   | 詳 細   |
|-------|---|
| 事業目的  | 特定分野の専門知識・経験や社会貢献への熱意を有し、地域づくりや島暮らしに関心を持つ都市部の外部人材を受け入れ、外部目線を活用した地域づくりの支援を行う。  |
| 制度開始  | 平成 23 年度(総務省地域おこし協力隊制度を活用)<br>全国の導入団体数/隊員数:31 団体/89 名 (H21)⇒1,176 団体/7,910 名 (R6)   |
| 予 算   | 特別交付税による財政支援(人件費 350 万円/活動費 200 万円)、市一般財源   |
| 特 色   | 市各部局における重点施策の推進を図ること、専門性を有する優秀な人材を確保するため、活動分野を絞った公募を実施するとともに、各隊員は各事業担当部局へ配属している。  |
| 隊 員 数 | 現役隊員:1 名(令和 8 年 3 月 31 日現在)<br>OB/OG :45 名(男性 23 名、女性 22 名)うち定住 21 名(男性 11 名、女性 10 名)<br>※定住者 21 名のうち起業定住 14 名(男性 6 名、女性 8 名)   |
| 推進体制  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体マネジメント:島おこし協働隊事務局(しまづくり推進部地域づくり課)<br/>例)外部への活動周知、隊員間の連携業務調整、取材対応等、採用事務</li> <li>・活動コーディネート:各担当課(※各隊員に担当者を配置)<br/>例)活動内容の策定、業務管理等</li> <li>・報酬・共済関係 :総務部人事課</li> </ul> |
| 成 果   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域・市民活動の活発化に寄与</li> <li>・隊員の活動をきっかけとする関係人口・移住定住者の存在<br/>＝「人が人を呼び込む好循環」</li> <li>・優秀な人材の定住</li> <li>・社会貢献型ビジネスの創出(任期終了後の起業者)</li> </ul>                                  |

協働隊の日々の活動の  
発信はこちら

島おこし協働隊  
Instagram



島おこし協働隊  
Facebook



## 対馬市島おこし協働隊 隊員プロフィール

### ◎中屋 桜（なかや さくら） 対州馬保存・活用支援担当



【所属】：上対馬振興部上県行政サービスセンター

【着任日】：令和5年4月1日

【ミッション】

対州馬の保存を行うために、安定した繁殖管理を目指す。

また、島内住民に向けた対州馬活用機会の増加と、島外ファン獲得・交流人口増加を目指す。

【プロフィール】

岐阜県高山市出身。高校・大学で7年間在来馬の飼養管理・普及啓発活動に取り組む。対馬での実習に参加した際に、乗馬体験や子供乗馬教室など、積極的に対州馬の活用に取り組む関係者の思いに触れ、対州馬を通して人や地域に関わりたいと思い志願した。

令和7年度  
対馬市島おこし協働隊年間活動報告  
(要旨)





# 令和7年度島おこし協働隊 年間活動報告書(要旨)

氏名 中屋 桜(対州馬保存・活用支援担当)

## I 令和7年度の活動成果

1. 教育活動としての対州馬の活用
  - (1) 小学校・保育園での体験授業
  - (2) 対州馬少年倶楽部
  - (3) あそうベイパークふれあい体験会
2. イベントの開催
  - (1) 対州馬ふれあい祭りの実施
3. 研究活動
  - (1) 体測値の計測
  - (2) GPS データの取得

## II 今後の展開について

1. 任期終了後の自身の活動
  - (1) 北海道へ移住し、大学院において対州馬の研究を継続予定
2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項
  - (1) 子供を対象とした教育活動の継続
  - (2) 対州馬の保存・活用に関わる人材の確保

## III 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

1. 対馬の魅力と課題  
対馬は豊かな自然環境と独自の文化を有し、対州馬は地域の歴史や生活と深く結びついた貴重な地域資源である一方で、頭数の減少や担い手不足といった課題も抱えており、今後は子どもたちを対象とした教育活動などを通して地域全体で保存と活用に関わっていくことが重要であると感じた。
2. 対馬への提案  
対州馬は保存だけでなく教育活動や体験活動を通して地域の中で活用していくことが重要であり、特に子どもたちが対州馬と関わる機会を増やすことで地域資源としての価値を理解するきっかけとなり、今後も多くの人々が対州馬に触れる機会をつくることで保存と活用の取り組みがさらに広がっていくことを期待している。

令和 7 年度  
対馬市島おこし協働隊年間活動報告



# 令和7年度島おこし協働隊 年間活動報告書

所 属 自然共生課

ミッション 対州馬保存・活用支援担当

氏 名 中屋 桜

## I 令和7年度の活動成果

### 1. 教育活動としての対州馬の活用

#### (1) 小学校・保育園での体験授業

依頼のあった小学校および保育園2校において、対州馬を活用したふれあい授業や見学の受け入れを実施した。授業ではえさやり体験や乗馬体験など対州馬と触れ合う機会を設けるとともに、対州馬の特徴や歴史について紹介し、地域資源としての対州馬への理解を深めることを目的とした活動を行った。

#### (2) 対州馬少年倶楽部

島内の小中学生を対象とした乗馬教室「対州馬少年倶楽部」を昨年度から継続して実施した。活動は月に1～2回程度行い、乗馬体験に加え、馬房清掃や馬の扱い方などの体験を通して、対州馬との関わり方を学ぶ機会を提供した。今年度は新たに3組が加入した。対州馬に触れる体験を通じて、対州馬への関心を高めることおよび担い手の育成を目的として活動を行った。これまで参加していた子供たちが新しく参加した子供に教える場面も見られ、異年齢交流の場としても機能していると考えている。



#### (3) あそうベイパークふれあい体験会

あそうベイパークにおいて、親子や大人を対象とした対州馬のふれあい体験会を月1回程度実施した。各回で1～3組の参加があった。

引き馬体験やふれあい活動を通じて、対州馬を身近に感じてもらう機会を提供し、地域住民に対して対州馬の魅力を発信した。

## 2. イベントの開催

### (1) 対州馬ふれあい祭りの実施

令和8年1月18日に対州馬ふれあい祭りを開催した。

イベントでは対州馬少年倶楽部の子どもたちによる発表会や対州馬レース、人 vs ウマリレーなどのプログラムを実施し、来場者が対州馬を身近に感じられる機会を提供した。

当日は約100名の来場があり、地域住民を中心に多くの方に対州馬の魅力を伝えることができた。



## 3. 研究活動

### (1) 体測値の計測

対州馬の体型に関するデータを収集するため、島内で飼養されている対州馬全頭を対象に各14か所の体測値の計測を行った。

今後、収集したデータを整理し、体型の特徴や変化について分析を進めていく予定である。

### (2) GPS データの取得

対州馬の運動量や行動パターンを把握することを目的として、GPS デバイスを用いた位置情報の取得を行った。

取得したデータをもとに、対州馬の移動距離や活動量を分析し、健康管理や飼養管理に活用できる基礎データの収集に取り組んだ。

## 4. その他

- ・ホースセラピー研修(静岡県富士宮市)
- ・先進地視察(鹿児島県曽於市・鹿児島市)

## II 今後の展開について

### 1. 任期終了後の自身の活動

任期終了後は北海道へ移住し、大学院において対州馬に関する研究活動を継続する予定である。これまで対馬において、対州馬の教育活動や普及啓発活動、調査研究に関わる中で、対州馬の現状や課題について現場で学ぶ機会を得ることができた。

活動の中で実施した体測値の計測やGPSを用いた行動調査などを通して得られたデータは、



今後の研究においても重要な資料になると考えており、来年度以降分析を行う予定である。

今後は大学院での研究を通じて対州馬に関する知見を整理し、対州馬の保存や飼養管理に役立つ研究成果としてまとめていきたいと考えている。

## 2. 対馬市に継続して取り組んでほしい事項

### (1) 子どもを対象とした教育活動の継続

対州馬は飼養頭数が少なく、現在は現場のスタッフを中心として保存活動が行われている。

しかし、単に頭数を増やすだけでは十分な保全にはつながらないと考える。野生動物とは異なり、これまで人と共に生活してきた対州馬にとっては、頭数を維持・増加させることと同じくらい、馬が活躍する場や役割を持つことが重要である。そうした活動は普及啓発の面だけでなく、地域資源としての価値を創出していくうえでも大きな意味を持つ。

対州馬少年倶楽部や親子ふれあい体験会、学校での授業など、子どもを対象とした普及啓発活動は、前任の吉原氏から引き継いだ対州馬の活用・普及において重要な取り組みとなっている。これらの活動は、地域の子どもたちが対州馬に触れ、学ぶことができる貴重な機会となっている。

また、馬を通して人との関わりの場が生まれ、異なる年齢や学校の子どもたちが交流する機会にもなっている。保護者の方からも「〇〇ができるようになった」といった声が聞かれるなど、対州馬は地域資源として学ぶ対象であるだけでなく、子どもたちの成長や教育の面においても大きな役割を果たしていると感じている。

こうした体験を通して、対州馬を地域資源として身近に感じてもらうことができるとともに、対州馬の保存や活用の重要性について考えるきっかけにもなっている。また、子どもの頃から対州馬と関わる経験を持つことは、将来的に対州馬の保存や活用に関心を持つ人材の育成にもつながると考えられる。

そのため、今後も子どもを対象とした乗馬体験や教育活動を継続して実施し、対州馬と地域の子どもたちが関わる機会を維持していくことが望まれる。

### (2) 対州馬の保存・活用に関わる人材の確保

対州馬の保存および活用を継続していくためには、日常的な飼養管理だけでなく、普及活動や教育活動に関わる人材の確保が重要である。地域おこし協力隊制度は、対州馬の保存や普及活動を担う人材を確保するうえで有効な仕組みであり、今後も継続して人材を受け入れていくことが望まれる。

新たな人材が関わることで、それぞれの専門性が生かされ、対州馬の活動が継続的に発展していくことが期待されるとともに、地域全体で対州馬を支えていく体制づくりにもつながると考えられる。



### Ⅲ 3年間の活動を終えるにあたり感じたこと

#### 1. 対馬の魅力と課題

##### (1) 対馬の魅力と課題

対馬は豊かな自然環境や独自の文化を有しており、その中で対州馬は対馬の文化や歴史を象徴する存在の一つであると感じた。

実習の時にも感じたことであるが、地域の方と話をしていると、対州馬に関わった経験を持つ方が多く、その当時のことを懐かしそうに話してくださる場面が多くあった。また、学校訪問で授業を行った際には、生徒から「うちに対州馬がいた」という声が聞かれることもあり、対州馬が地域の生活と深く関わってきた歴史を実感する機会となった。

さらに、子どもたちが対州馬と触れ合う中で「将来は馬に関わりたい」といった声が聞かれたり、保護者の方から「子どもがとても楽しそうにしている」という感想をいただいたりすることもあり、対州馬を通して地域の人々と新たな関わりが生まれていることを感じた。馬がこのように地域の生活や文化の中に根付いている地域は、全国的に見ても多くはないのではないかと感じている。

実際に活動を通して、多くの子どもや地域の方々が対州馬に興味を持ち、触れ合いを楽しむ姿を見ることができ、対州馬が対馬にとって貴重な地域資源であることを改めて実感した。

一方で、対州馬は飼養頭数が少なく絶滅の危機に瀕していることや、保存活動に関わる担い手不足など、多くの課題も抱えている。

対州馬の保存や活用を継続していくためには、地域全体で関わりを持ちながら取り組みを続けていくことが重要であると感じた。特に子どもたちを対象とした教育活動を継続していくことで、将来的な担い手の確保にもつながる可能性があるのではないかと考えている。

##### (2) 対馬への提案

対州馬は保存だけでなく、教育活動や体験活動などを通じて地域の中で活用していくことが重要であると感じた。

特に子どもたちが対州馬と関わる機会を増やすことで、地域資源としての価値を理解するきっかけにつながると考えられる。

今後も教育活動や体験活動を継続しながら、多くの人が対州馬に触れる機会をつくることで対州馬の保存と活用がより広がっていくことを期待している。